

最終回

イスラエルレポート2004

編集部 浅川芳裕

「黄」と「緑」が織り成す 葛藤と決断



今回の「主役」ニール・クローズマン(スウェーティー生産者)

イスラエル南部ネゲブ砂漠の農場からテルアビブのホテルに戻ってきた。体内には、まだ砂漠の熱気がこもっている。今朝鏡を見たよりも、心なしか青ざめている気がする。日に焼けているはずなのに…。明日は5時起きだが構いはしない、地酒でもあおつて顔を赤らめて帰つてくれればわけはない。

地中界特有の夕風に誘われて、海岸沿いのオーブン・ショットバーをハシゴした。

「君、日本人の割には饒舌だね。今ごろイスラエルに何しにきた?」

カウンター越しに女の子と盛り上がりていた会話がさえぎられた。

「イスラエル農業の取材にきたと答えておけば、黙つてもらえますか」

その無礼な男は、出身はオランダ、名前は自称ポール・ミドル。ありふれた名前だ。職業は、武器のパート商人で、U A Eのドバイを本拠地に置いているという。

イスラエル南部ネゲブ砂漠の農場からテルアビブのホテルに戻ってきた。体内には、まだ砂漠の熱気がこもっている。今朝鏡を見たよりも、心なしか青ざめている気がする。日に焼けているはずなのに…。明日は5時起きだが構いはしない、地酒でもあおつて顔を赤らめて帰つてくれればわけはない。

武器商人 ポール・ミドル

腹立たしい限りだ。最近じやあ『作らなかつたら、公共住宅を補助される』っていう政策がまかり通つてゐるのを知つてゐるか? 農家票目当てにそれを選挙公約にした政党が勝つたのさ。E Uマーケットの変化のことなど考へないで作り過ぎちゃつただけなのに、価格が暴落して農家が困つてゐるのを救つてやるらしい。家をもらえるんだとさ。今では、その味を上めた農家の要求はエンドレスつてわけ。ひでえ話さ」

気が付いてみれば女の子そっちのけで、農業構造問題からパレスチナ問題、イラク情勢、ドバイの急成長に至るまで、談義に花を咲かせた。

現地滞在の外国人を装うために日本から持つてきていた携帯電話に目をやる。もう5時15分前だ。ヤバイ。ポールと握手してホテルに急行すると、案の定、視察に同行してくれるヨシイさんがロビーで待つてゐる。朝帰りがバレないよう、エレベータに駆け込んだ。

「日本人は時間厳守と聞くが、君もそうみたいだね。5時キッカリだ。それにしても顔色が悪そうだが、ちゃんと寝たみたいだね。5時キッカリだ。それにでも、どここの世界にも払わないヤツがいてね、そこで俺の登場つわけさ」

ヨシイさんの鋭いツッコミにひるまず、さあ出発だ。

回収請負人



今回の視察に同行してくれたマンゴー生産者のヨシさん

彼がやつてきたら誰でも払いそうなオランダ農業を知つてゐるだろう。チューリップやトマトやバターとかを作つてゐる。海外では有名だが、俺達商人には



連載

イスラエルレポート2004

ニールは、今回の主役のはずのニール・クローズマンさんを訪問した瞬間に的中してしまった。ニールさんと握手をすると、そのまま「ギュッ」。か弱そうなニールさんは悲鳴をあげていた。ボードとの信頼関係は厚そうだ(?)。

ニールさんの農場は、ガラリア湖北部に位置するハフラ峡谷にひろがる柑橘产地にある。約80haの果樹園で、スヴィーティーを中心的に、モモ、ネクタリン、プラムを栽培している。一年ほど前、父親から経営委譲を受け、今では栽培だけでなく、スタッフ管理や出荷管理もだんだん様になってきたという。年齢は27歳。すぐ恥ずかしがり屋の性格だが、同年代のせいいかすぐに打ち解けた。日本からの来訪者に自分の「作品」である圃場を次々に紹介してくれた。

スヴィーティー栽培で一番難しいのは、指定された時期に、ムラのない鮮やかな「緑色」を出すことだ。完熟すれば黄色い柑橘なのに、ボードが商品差別化のために、緑の果物という意外性を売りにしたからだ。

「農家としては、一番おいしい黄色を食べてほしいけど、これだけPRされた

らは、今回の主役のはずのニール・クローズマンさんを訪問した瞬間に的中してしまった。ニールさんと握手をすると、そのまま「ギュッ」。か弱そうなニールさんは悲鳴をあげていた。ボードとの信頼関係は厚そうだ(?)。

△黄色いフルーツを「緑」に作る



スヴィーティーは完熟前の青いままで収穫

らもう後戻りできそうもないね。作物生産からいつても、どんどん黄色くなるのは当然なのに、黄色くなつたら等級が落ちるのはつらいよ」

今までの連載でも見てきたように、緑をキラーカラーにしたのはヒットだったが、初めて現場に行つてみると相当無理をしている様子がうかがえた。後ろで、ヨシイさんが「お前余計なことを」といいたげな顔でニールを牽制しながら、「ヨシ（筆者のファーストネーム）、そろそろ時間だ」とせかす。まだ農場にきて10分もたつていないので…。

どうやって長期間「緑色」をキープしているのか。答えは、窒素とカリの施肥量や時期にあるらしい。細かくはヨシイさんにせつつかれて聞けなかつたが、試行錯誤しながら栽培ノウハウを培つたとて世界中の流通業者に認知されている。取得すれば取引の可能性はもつと広がるはず。しかし、取得しないでいくら自分がISOと同じレベルで品質管理しているといつても、はるか遠くにいるお客様に通じなければ意味はないでしょう」という。いわば顧客と対等の物差しを得たというわけだ。

この後、彼が発したのが、この連載の冒頭であげたこの言葉だ。

圃場内には、作付け列毎に、細かく番号が振られた杭が立っている。「ISO 9002を取得する時から、圃場管理に使つているんだ」とニールさん。生産工程の効率化を図つた結果、作物・品種・ライン毎に施肥や農薬散布を見直せるようになつたという。きっかけは、取引先のマーケス&スペンサーズ（英国の大手スーパー）から、取引条件としてISOの取得を持ちかけられたことだ。これを顧客からの要求と見るが、ビジネスチャンスと見るかはその人の経営判断による。ニールさんの場合、「ISOは、マーケス&スペンサーズだけではなく、品質マネジメントシステムとして世界中の流通業者に認知されている。

△ISOを取得する意味

「自分の名を傷つけるような商品は何があろうが絶対出荷しない。すべての農業、技術、管理はその確立を減らすためにあると思っている。世界中にいるお客様を一度でも落胆させることは許されないからね」

モモを市場に出荷に出かけるところの親父さんが通りかかった。

「親父さんも元気そうだけど、まだ経営に口を出してくるんじゃないの？」

「いやあ、まだまだ農家としての生き方は親父にはかなわない…。こうして烟にいるのが好きな俺から見ても、親父は何というか本当に土や作物が好きなんだろうね。愛着の次元が違う」

話の尽きない二人の後ろで、ヨシイさんがクラクションを鳴らしている。

次は、柑橘類の選果場視察だ。

訪問した時は、日本向けの出荷が終わつたばかりだった。イスラエルや欧米に比べ、日本の輸入業者からの品質指定が一番厳しく、入荷時の水分38%、糖度10%を厳守しなければならないという。また地中海ミバエの問題で、選果場から



連載

イスラエルレポート2004



日本向けのスويーティー出荷ケース

いえば農業共同体という訳語を思いつく
た。日本向特選—ジャッファ
日本
SWEETIE
PRODUCE OF ISRAEL
YAKHIN Agro
YAKHIN Agro
YAKHIN Agro
YAKHIN Agro

方が多いと思うが、実際は、イスラエル
にいる全275キブツの売上をトータル
すると、農業・食品産業が占める売上
割合は18%に過ぎない。

農業共同体とベンチャー企業が融合し
た強みについて、キブツ・バラアムの工
場長は語ってくれた。

「本当にうまいりんごが作れれば、点滴
コックを作るなんて訳はない。農業を父
親から学びながら、医療製品の設計や工
場管理を訓練されたのはすごくいい経験
だつた。農業は『複雑系の塊』のような
仕事だから、本当の答えを探すのがすご
く難しいからね。実は、工業も同じなん
だつて最近わかつてきたよ」

だつた。ポーランドとロシアから移民し
てきた両親が苦労して開墾した畠のお陰
で今の俺があるのだから」といい切る。
彼は1982年に親の跡を継いだ後、両
親が築いた露地野菜経営からマンゴーに
転換した。マンゴーの高級果実としての
地位はしばらくは変わらないと予想し、
この地の気候を品質に最高に生かせる作
物と判断したからだ。初めて収穫するま
でに6年かかったが、その苦労の甲斐は
あつた。今ではマンゴー園で育った娘一
人が、週末に手伝いにきてくれるという。
「それでいいんだ」とつぶやきながら、
無事視察を終えた後でヨシイさんは自家
製のマンゴーをむいてくれた。「マンゴー
はビタミン豊富だからな。今晚も徹夜
だろ!精力付けに一杯食つとけ」(終り)

さて、なぜヨシイさんが訪問時間を気に
しているのか。その原因は、ぼくのお
願いで予定になかったキブツ(農業共同
体)・バラアム訪問を実現するためだ。
バラアムは、筆者が19歳の時に働いた
ことのある農場で、今回のイスラエル訪
問を機会にぜひ再訪したいと思つてい
た。イスラエル最北部に位置するバラア
ム農場は、リンゴと綿を主体に栽培して
いた。バイト中のぼくの仕事は、綿畠に
灌漑チューブを敷設することだったが、
農場に行つてみるとその綿畠がない。話
を聞くと、綿では世界の大產地との競争
には勝てないと判断して、ぼくが去つた
あとやめてしまつたらしい。

今では、リンゴ栽培も規模を縮小し、
独自技術を持つている医療用の点滴コッ
クの工場を拡大していた。農業部門の縮
小、他産業の拡大は、バラアム農場に限
つた話ではない。イスラエルに世界各地
から移民してきたユダヤ人は、農業をす
るために入植してきたのではなく、生き
残るために農業をするしかなかつたので
ある。移民の中には、もともと農民だつ
た人は少なく、科学者や医者、ビジネス
マン、官僚など、それぞれの国で専門分
野を持つていた人が多かつた。そんな
人々が、自分が受けた教育やビジネス経
験が必ずしも發揮できない農業という分
野で切磋琢磨し、農業で食えるようにな
つていつたのだ。その後、農業で蓄えた
お金を投資して、次々にベンチャー企業
を立ち上げていったのである。キブツと
企業が融合した強み

農業共同体とベンチャー企業が融合し
た強みについて、キブツ・バラアムの工
場長は語ってくれた。

「本当にうまいりんごが作れれば、点滴
コックを作るなんて訳はない。農業を父
親から学びながら、医療製品の設計や工
場管理を訓練されたのはすごくいい経験
だつた。農業は『複雑系の塊』のような
仕事だから、本当の答えを探すのがすご
く難しいからね。実は、工業も同じなん
だつて最近わかつてきたよ」

だつた。ポーランドとロシアから移民し
てきた両親が苦労して開墾した畠のお陰
で今の俺があるのだから」といい切る。
彼は1982年に親の跡を継いだ後、両
親が築いた露地野菜経営からマンゴーに
転換した。マンゴーの高級果実としての
地位はしばらくは変わらないと予想し、
この地の気候を品質に最高に生かせる作
物と判断したからだ。初めて収穫するま
でに6年かかったが、その苦労の甲斐は
あつた。今ではマンゴー園で育った娘一
人が、週末に手伝いにきてくれるという。
「それでいいんだ」とつぶやきながら、
無事視察を終えた後でヨシイさんは自家
製のマンゴーをむいてくれた。「マンゴー
はビタミン豊富だからな。今晚も徹夜
だろ!精力付けに一杯食つとけ」(終り)

ら派遣された検疫官のチェックを受けなければならぬ。スويーティーだけでなく、スويートオレンジ、グレープフルーツ、ポメロ、そして近年日本をターゲットにマーケティングしているシャロン柿(命名は、シャロン地方で栽培が盛んなことから)など、すべてが検疫確認を受けている。

△農業共同体とベンチャー企業が融合した強み

さて、なぜヨシイさんが訪問時間を気にしているのか。その原因は、ぼくのお願いで予定になかったキブツ(農業共同体)・バラアム訪問を実現するためだ。バラアムは、筆者が19歳の時に働いたことのある農場で、今回のイスラエル訪問を機会にぜひ再訪したいと思つていた。イスラエル最北部に位置するバラアム農場は、リンゴと綿を主体に栽培していた。バイト中のぼくの仕事は、綿畠に灌漑チューブを敷設することだったが、農場に行つてみるとその綿畠がない。話を聞くと、綿では世界の大產地との競争には勝てないと判断して、ぼくが去つたあとやめてしまつたらしい。

今では、リンゴ栽培も規模を縮小し、独自技術を持つている医療用の点滴コックの工場を拡大していた。農業部門の縮小、他産業の拡大は、バラアム農場に限つた話ではない。イスラエルに世界各地から移民してきたユダヤ人は、農業をするために入植してきたのではなく、生き残るために農業をするしかなかつたのである。移民の中には、もともと農民だった人は少なく、科学者や医者、ビジネスマン、官僚など、それぞれの国で専門分野を持つていた人が多かつた。そんな人々が、自分が受けた教育やビジネス経験が必ずしも發揮できない農業という分野で切磋琢磨し、農業で食えるようになっていったのだ。その後、農業で蓄えたお金を投資して、次々にベンチャー企業を立ち上げていったのである。キブツと企業が融合した強み

農業共同体とベンチャー企業が融合した強みについて、キブツ・バラアムの工場長は語ってくれた。

「本当にうまいりんごが作れれば、点滴コックを作るなんて訳はない。農業を父親から学びながら、医療製品の設計や工場管理を訓練されたのはすごくいい経験だつた。農業は『複雑系の塊』のような仕事だから、本当の答えを探すのがすごく難しいからね。実は、工業も同じなんだつて最近わかつてきたよ」

△残りたいヤツが残る

久しぶりにキブツを徘徊してみた。めつきり子供の数が減り、賑わいを見せていた外国人の労働者寮もひつそりとしている。キブツでは軍役を終えた男女に旅費を支給し、1年間好きな国々で遊ばせる慣習がある。見聞を広めさせた後に、「それでも共同体に残りたいヤツは残れ、去るものは追わず」と二択の決断を迫るのである。ヨシイさんも農業共同体の出身で、決断をした一人だ。「俺の世代は、『去る』ことイコール『逃げる』

農業経営者 2004年5月号 68

筆者が19歳の時に働いていたバラアム農場のりんご選果場